【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

| 都道府県名 | 大阪府 |
|---|---|

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

| 学校名 | 能勢町立久佐々小学校 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学年 | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 養護学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | 2 | 2 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | １９ | ３３ |
| 児童数 | ７５ | ７５ | ９９ | ８５ | １０４ | ９７ | １０ | ５４５ | |

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

確かな学力をつけるための授業づくり

２．校内研究と方法

（１）実施学年・教科

**全学年・算数**

（教科設定の理由）

・以前より加配教員が中心になり、「算数科」で研究をすすめてきた。

・本校の児童の実態から

学習内容の定着率が低く、自己解決力が乏しい等学習に向かう姿勢が育っていないという本校の児童の実態をふまえ、低学年からの積み重ねを大切にしなければならないと考えた。

・研究教科・テーマが変わったり、職員の異動が多かったりしたため、職員の共通理解を図る必要があった。今までの研究の成果を踏まえさらに研修・研究をすすめるとともに、学校として系統的・統一的な指導をおこなうことを確認した。

（２）年次ごとの計画

| | |
|---|---|
| 平成15年度 | **テーマ「確かな学力をつけるための授業づくり」**<br>学習内容の定着率が低く、既習内容を思い起こして解決していこうとする力が乏しい。学習に取り組む姿勢も、低学年からの指導が児童自身のものとなり得ていない。等の本校児童の学習実態から、以下の課題を設定した。<br>◆基礎的・基本的な内容の定着を図るための授業の研究。<br>◆指導法や内容の系統性について研修を深め、教職員の共通理解のもとに統一した指導を行う。<br>◆各学年の加配教員を中心にして、教材研究・教材作り・多様な学習形態の工夫などに取り組む。<br>◆学力実態テストを行い、つまずきに対するきめ細かな指導に役立てる。<br>◆学習に取り組む姿勢を育てる。 |

| | |
|---|---|
| 平成16年度 | **テーマ「確かな学力をつけるための授業づくり」**<br>◆基礎的・基本的な内容の定着を図るための授業の研究。<br>◆加配教員を中心にして、教材研究・教材作り・多様な学習形態の工夫。<br>◆低学年からの積み重ねを大切にし、学習に取り組む姿勢を育てる。<br>◆年３回の学力実態調査を行い、きめ細かな指導に役立てる。<br>◆平成15年度作成の四則計算の方法やかけわり図、３段表などの系統性を配慮する。<br>◆学級集団を育てる手立てを研究、実践する |

（３）研究推進体制

7 次改善加配教員等を活用し、全学年の算数科の授業でＴ・Ｔ体制を組み指導を充実させている。学年を分割した習熟度別のグループ編成や児童の意欲・理解度にあった授業を展開することで、課題を持つ児童にも「計算力」や「数学的な考え方」を身に付けさせる取り組みを進めてきた。

本年度「学力向上フロンティア事業」の指定を受け、個に応じたきめ細かな指導の一層の充実を図るための取り組みを開始した。**7 次改善加配教員と 2 名の学習指導充実加配教員はそれぞれ担当学年の算数科の指導の中心となるとともに、系統的・横断的な学習内容の検討・学習形態の工夫・指導法の研究などに取り組むために「フロンティア委員会」を発足させた。**

夏休みには「フロンティア委員会」の呼びかけで、講師を招聘し基礎・基本の定着に向けた『個に応じた指導』の指導法や学習内容の系統性等についての学習会を全教員で行った。

「フロンティア委員会」を月 1 回定期的に行い、学力実態調査の実施時期や問題の検討・テストの分析などの話し合いや全校で共通確認する学習内容や指導事項などを検討した。また、学期に 2 回ずつの校内授業研及び事後研究会の実施や、その中で確認事項を提案し全教員の共通理解を図るなど本校研究体制の推進に大きな役割を果たしている。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

◆それぞれの学年において加配教員（7 次改善加配教員１名、学習充実加配教員３名と若年特別嘱託１名）が中心となって、指導方法や指導形態の工夫・改善をすすめた。4 年生のクラス２分割、5 年生の習熟度別分割や均等分割、また 6 年生でのコース別学習など各学年が積極的にとりくんだ。そして、それらの取り組みをみんなのものとするため、随時交流会を行った。

◆どの学年の児童も、一斉授業に比べ前向きの姿勢で取り組んでおり、意欲的に学習していた。保護者等にも学校便り・学級通信での紹介などを通して理解を図った。保護者からは好意的な感想が寄せられた。

◆本年度は年間６回、算数科の研究授業を設定した。研究授業や研修会では、補助図指導や単位のつけかた、四則計算のパターン化等、統一した指導を行うための共通確認をした。

◆数年来、3 年生以上が算数で毎時間取り組んできた１分間計算を、１・２年生も実施した。

◆児童の実態交流が進み、課題解決に向けて教師が集団としてとりくむ体制がすすんだ。

◆学期ごとに学力実態テストを実施し、つまずきの早期発見・分析を行い、手立てを講じるようにした。また、２月の職員会議で、１・２学期の学力実態テストの結果と分析のまとめについてフロンティア・ティーチャーと各学年のフロンティア委員から報告があった。

集計結果及び点数分布表からは児童の学習理解が向上しつつあることが読み取れ、本校の地道な取り組みの成果が上がってきていることがうかがえる。全校的には「数と計算」領域は７４％以上の正答率であったが「図形」「量と測定」「数量関係」の順に正答率が低くなる。

引き続いて各学年のテスト問題を元に結果と分析を報告した。どの学年も共通する傾向としては、「文章題がにがてである。（文章を読み取る力の不足、数量を置き換えて考える力）「単位換算や単位を含む計算がにがて」などの課題が明確になった。今後の指導の中で繰り返し学習し定着を図っていきたい。

◆低学年からの積み重ねを大切にするため、ノート指導や学習に向かう姿勢など全学年でとりくんだ。授業中落ち着いて学習に集中する姿が多くの教室で見受けられ、ノートのとり方も高学年でも丁寧に書く児童が多くなった。

２．今後の課題

◇「確かな学力をつけるための授業」の研究・実践。
◇学習集団をどうつくっていくか。
◇児童一人ひとりの自己学習力をいかに育てるか。
◇基本的な生活習慣も含めた低学年からの積み重ね、補助図指導・四則計算のパターン化等の共通確認事項を継続して指導していく。
◇家庭との連携を密にし、家庭学習の充実を図るとともに協力して指導を行う。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取り組み

学力実態調査の実施

・実施内容

学期毎の学習内容を網羅して作成する。学期ごとに調査・分析を行う。

・目的

単元別、領域別の定着の様子を分析・検討し、早い時期に手立てを講じるため。

・実施時期

年間３回

第１回・・4 月（前学年の学習内容の定着の様子をつかみ、今後の指導の参考とする。

第２回・・７月（当該学年の１学期の学習内容の定着の様子をつかみ、2 学期の取り組みへとつなげる）

第３回・・12 月（当該学年の２学期の学習内容の定着の様子をつかみ、３学期の取り組みへとつなげる）

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

本年度は１年目でもあり、特に学校外に対して研究成果の普及等は行っていない。
保護者に対しては、学校便り・学年通信などで、分割授業・習熟度別学習・コース別学習等の取り組みの意義や内容・児童の様子などについて知らせている。
来年度は、研究をさらに進め、研究の成果を発表したいと考えている。

---

◇次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること（複数チェック可）

【新規校・継続校】　１５年度からの新規校
【学校規模】　１９～２４学級
【指導体制】　少人数指導　Ｔ．Ｔによる指導
一部教科担任制
【研究教科】　算数
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　有